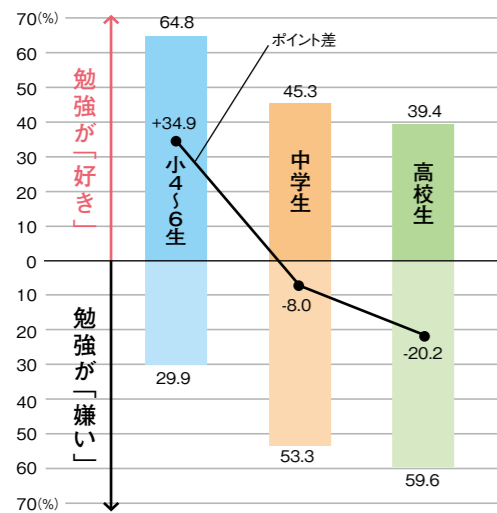
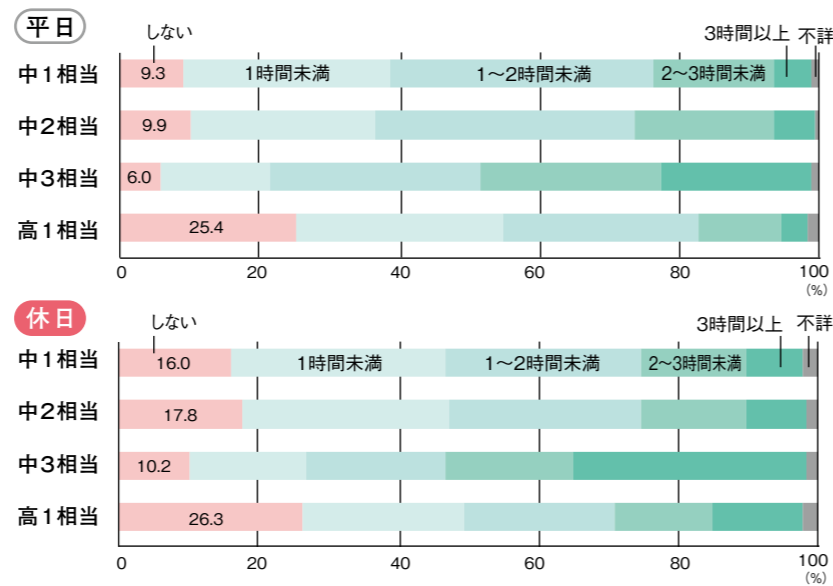


【図表2】勉強の「好き」「嫌い」の割合 (学校段階別)



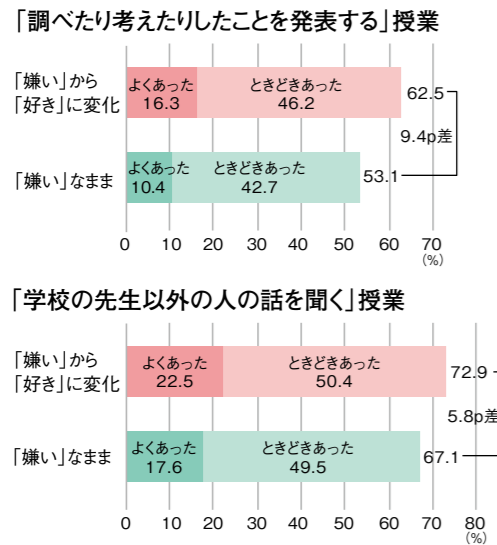
\*「好き」は「とても好き」+「まあ好き」の比率。「嫌い」は「あまり好きではない」+「まったく好きではない」の比率。無回答・不明の比率は表示していない  
\*東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2016」

【図表1】家や塾での学習時間の変化



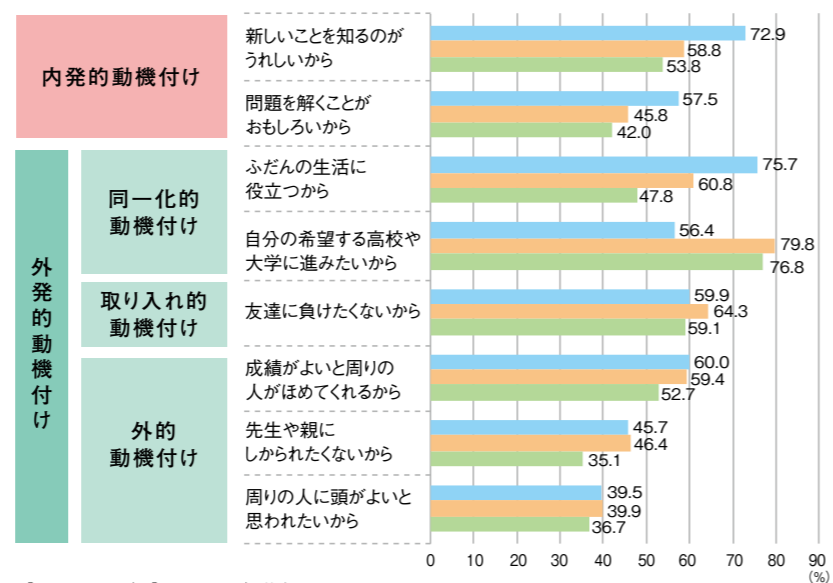
\*文部科学省・厚生労働省「第13～16回21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)」

【図表4】この1年間の授業経験と、勉強の好き嫌いの変化(高校生)



\*東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2016」

【図表3】勉強する理由(学校段階別)



\*「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の比率  
\*東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2016」

【図表5】理数系科目の履修状況(高校)

科目	履修率 (%)
数学	100(必修)
数学I	83.4
数学II	21.6
数学A	83.8
数学B	54.8
数学活用	2.7
理科	33.1
科学と人間生活	56.7
物理基礎	16.2
物理	79.2
化学基礎	27.5
化学	84.1
生物基礎	20.9
生物	26.9
地学基礎	0.8
地学	0.5
理科課題研究	
情報	71.5
社会と情報	28.4
情報の科学	

\*文部科学省「平成27年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査(平成25年度入学者抽出調査)」



高校改革の「今」  
Q&A

入試対策→探究学習へ  
高校教育

多くの高校の教員が、新しい授業や評価法の試行錯誤に追われている。新学習指導要領の実施を間近に控え、改革が加速しているからだ。「未来の大学生」は今、高校でどんな教育を受けているのか。

Q 高校教育の課題とは？

**A** 学習姿勢や学習時間など、大学と似た課題を抱える。テクノロジーが生活に溶け込み、社会的課題の解決や経済発展をもたらす社会、Society5.0。この新たな時代には、機械が持ち得ない、世界を理解する力、想定外の状況と向き合う力が必要とされる。好奇心や探究力を持つて主体的に学びに向かう姿勢が学修(習)者に求められる中、高校は今、さまざまな教育改革を行っている。背景にあるのが、進級・進学するに連れ低下する学習意欲だ。高校生の学習状況を見てみよう。中学時と比べ、校外学習をしないくなる生徒が急増し【図表1】、勉強が嫌いな生徒の割合も増えている【図表2】。机に向かう理由として「おもしろいから」などの内発的動機付けで勉強する中高生の割合が低くなる一方、「進学のため」など、外発的動機付けで勉強する割合は高まる【図表3】。履修する科目も入試に課せられやすいものに集中し、理数系科目の履修率は大きく偏る【図表5】。ちなみに、【図表1】でその一部を

**POINT** 高校の課題は大学の課題。連続性のある人材育成を。

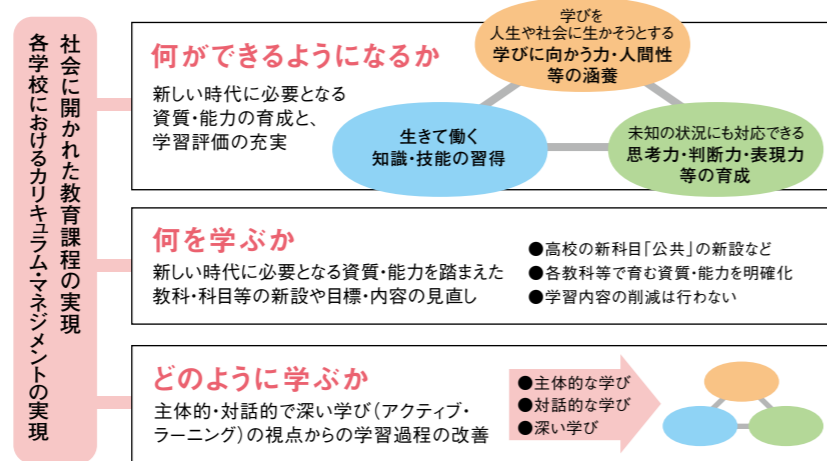
紹介した「21世紀出生児縦断調査」によると、「楽しい」と思える授業がたくさんある。など授業の満足度・理解度も、学年が上がるに連れ低下傾向にある。しかし、こうした傾向を変えることは不可能ではない。【図表4】を見ると、勉強が「嫌い」から「好き」になった生徒は、嫌いなままの生徒よりも、「調べたり考えた」りしたことを発表する「先生以外の人の話を聞く」授業を受けたとする比率が高い。これは、そうした授業方法が生徒の学習意欲の改善に、何らかの影響を与えていることを示唆するものと言える。こうして見ると、高校教育と大学が抱える課題は、共通点が多い。これからの時代を生き抜く人材の育成が高大共通の課題だとすると、学校段階が上がるに連れ主体的な学修(習)から遠ざかる現状を連携し改善していくことが、大学にも求められているのではないだろうか。



【図表9】学習指導要領改訂後の教科・科目(高校)

教科	科目	標準単位数	必修科目
国語	現代の国語	2	●
	言語文化	2	●
	論理国語	4	
	文学国語	4	
	国語表現	4	
	古典探究	4	
地理歴史	地理総合	2	●
	地理探究	3	
	歴史総合	2	●
	歴史探究	3	
公民	公共	2	●
	倫理	2	
	政治・経済	2	
数学	数学I	3	●
	数学II	2	●
	数学III	3	
	数学A	2	
	数学B	2	
	数学C	2	
理科	科学と人間生活	2	●
	物理基礎	2	●
	物理	4	
	化学基礎	2	●
	化学	4	
	生物基礎	2	●
芸術	音楽I	2	●
	音楽II	2	●
	音楽III	2	
	美術I	2	●
	美術II	2	●
	美術III	2	
	工芸I	2	●
	工芸II	2	
	工芸III	2	
	書道I	2	●
外国語	英語コミュニケーションI	3	●
	英語コミュニケーションII	4	
	英語コミュニケーションIII	4	
	論理・表現I	2	
	論理・表現II	2	
	論理・表現III	2	
家庭	家庭基礎	2	●
	家庭総合	4	●
情報	情報I	2	●
	情報II	2	●
理数	理数探究基礎	1	
	理数探究	2~5	
総合的な探究の時間		3~6	●

【図表8】学習指導要領改訂の考え方



【図表10】「学習評価の観点」の変化

現行学習指導要領	新学習指導要領
学習評価の観点	資質・能力の3つの柱
知識・理解	知識・技能
技能	思考力・判断力・表現力等
思考・判断・表現	学びに向かう力・人間性等
関心・意欲・態度	

【図表11】多様な評価方法の例

評価方法	概要
パフォーマンス評価	知識やスキルを使いこなす(活用・応用・統合)することを求めるような評価方法。論説文やレポート、展示物といった完成作品(プロダクト)、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演(狭義のパフォーマンス)を評価する。
ルーブリック	成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語(評価規準)からなる評価基準表(下記はイメージ例)。
ポートフォリオ評価	児童・生徒の学習の過程、成果などの記録や作品を計画的にファイル等に集積。そのファイル等を活用して児童・生徒の学習状況を把握するとともに、児童・生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示す。

Q 新学習指導要領のポイントとは？

【図表7】高等学校教育改革

「学力の3要素」の確実な育成

教育課程の見直し

2016年12月答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」

高等学校学習指導要領を改訂【育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の見直し(2018年3月)】

学習・指導方法の改善と教師の指導力の向上

高等学校学習指導要領を改訂【主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の視点からの授業改善の推進(2018年3月)】

2015年12月答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」

「教育公務員特例法等の一部を改正する法律案」(教育公務員特例法、教育職員免許法、教員研修センター法の一括改正)が成立(2016年11月)

多面的な評価の推進

「高校生のための学びの基礎診断」の認定基準等を策定(2018年3月)

「キャリア・パスポート(仮称)」の調査研究を実施(2017年度から)

高校学習指導要領の改訂を踏まえ、指導要録参考様式を見直す予定(2018年度以降)

「検定事業者による自己評価・情報公開・第三者評価ガイドライン」を策定(2017年10月)

【図表6】新時代に対応した高等学校改革

- 1 学科の在り方**  
生徒の受け入れ<教育課程の編成・実施><修了認定>に関する方針を策定/普通科を特色化するための類型を国が提示/文系・理系科目をバランスよく学ぶくみづく
- 2 高等学校の教育内容、教科書の在り方**  
新学習指導要領の着実な実施/社会変化に対応するための学習指導要領、教育課程の見直し/技術革新の進捗が早い分野について教科書の見直しを検討
- 3 定時制・通信制課程の在り方**  
生徒のキャリア形成に必要な社会的スキルの育成方法を検討/通信制課程における「高校生のための学びの基礎診断」の活用/第三者評価を踏まえた広域通信制高校の質の向上
- 4 教師の養成・研修・免許の在り方**  
校内研修の充実/教師の資質の目安となる指標を学校種ごとに記述/ポストドク、企業人、アスリート、芸術家など外部人材の活用/特色化を推進する校長の在職期間の長期化
- 5 地域や大学等との連携の在り方**  
市町村、産業界、大学等との協働による地域課題解決型学習の実現/コミュニティスクール導入、地域学校協働活動の推進/高校と地域をつなぐコーディネーターについて検討
- 6 中高・高大の接続**  
文系・理系に偏った大学入試の見直し/入試改革、教育の質向上に取り組む大学への支援の充実/就職希望者の職業選択時のルール「一人一社制」を見直し
- 7 特別な配慮が必要な生徒への対応**  
不登校などに関する教育相談体制の充実/通級による指導の充実/障害のある生徒の自立に向けた関係機関との連携/日本語指導が必要な外国人生徒の受け入れ体制の充実
- 8 少子化への対応**  
離島・中山間地域等の小規模校へのICT等の導入、大学等との連携強化/再編や小規模校活性化の事例を情報提供

Q 高校教育の改革とは？

A 新学習指導要領を軸に、学力の3要素育成に向けて改革中。

高校教育の改革は、高大接続改革の一環として2016年度前後から進められている【図表7】。高大接続改革における高校の役割は、学力の3要素を育成して大学にバトンを渡すこと。2018年に改訂され、2022年度入学生から実施される学習指導要領は、改革の大きな柱だ。

加えて、\*1カリキュラム・マネジメント、アクティブ・ラーニング、ポートフォリオなどの導入が、ここ数年で急速に進展した。新学習指導要領実施前の現時点で、改革はすでに一定の歩みを見せている。

さらに本年5月、内閣の私的諮問機関である教育再生実行会議による第十一次提言が公開された。Society5.0時代への対応を多分に意識したもので、「技術の進展に対応した高等学校改革」【図表6】が唱えられている。後者の①に、大学で言う「3つのポリシー」や「特色化」にあたる取り組みが記載されていること、②では、新学習指導要領や教育課程のさらなる見直しと提言されていることなど

POINT 将来の入学者が受ける教育をふまえて、入試、カリキュラム、授業、評価法を見直す。

新学習指導要領がめざすのは知識・技能だけでなく、それらを未知の状況や社会に生かす資質・能力の育成だ【図表8】。よって科目、学び方、評価法が大きく変わる。

教科・科目は【図表9】のようになる。数学と理科にわたる探究的教科「理数」の2科目をはじめ、「探究」が付いた科目が複数新設される。政治や経済の諸課題を学ぶ「公共」、プログラミングを含む「情報I」が必修になるほか、既存の科目も学習範囲や指導方針が変更されたものが多い。

これら全教科・科目を、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価する【図表10】。思考や態度はペーパーテストでは測りづらい、学習プロセスも含めて評価する必要がある。レポートやプレゼンなどに取り組ませるパフォーマンス評価、日々の学びを記録するポートフォリオやルーブリックが活用されつつある【図表11】。

POINT 国際的な流れも押さえ、Society5.0時代に向けた教育接続を。

改革の背景には、国際的な教育の潮流がある。日本の教育は従来コンテンツ、つまり「何を教えるか」を重視してきた。しかし、現在は、\*2PISAで示されているような21世紀型のキー・コンピテンシー(主要な資質・能力)すなわち、「どのような力があったのか」「何ができるようになったのか」が着目されるようになっていく。新学習指導要領【図表8】や2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)【図表6】も、この流れをくんでいると言えよう。

改革の背景には、国際的な教育の潮流がある。日本の教育は従来コンテンツ、つまり「何を教えるか」を重視してきた。しかし、現在は、\*2PISAで示されているような21世紀型のキー・コンピテンシー(主要な資質・能力)すなわち、「どのような力があったのか」「何ができるようになったのか」が着目されるようになっていく。新学習指導要領【図表8】や2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)【図表6】も、この流れをくんでいると言えよう。



知っておきたい

# Society5.0時代の高等学校改革パッケージ

事業名	WWL(ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業	スーパーサイエンスハイスクール (SSH) 支援事業 ※継続	地域との協働による 高等学校教育改革推進事業
目的	新たな社会をけん引する人材の育成		・共通して求められる力の育成 ・Society5.0を地域から分厚く支える人材の育成
予算・指定校数	[予算]1.13億円(新規) [指定校数]10校程度(1000万円/年・校)	[予算]22.19億円 [指定校数]新規指定30校程度(750万~1200万/年・校。2018年現在204校)。指定校の中から重点校14校(2018年現在)	[予算]2.51億円 [指定校数]プロフェッショナル型(専門学科中心10校程度)、地域魅力化型(普通科中心20校程度)、グローバル型(学科共通20校程度)
概要	◆将来、イノベティブなグローバル人材を育成するため、高校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、より高度な学びを高校生に提供するしくみを構築する。高校生国際会議の開催や、高校のアドバンス・ラーニング・ネットワークの形成により、WWLコンソーシアムにおける拠点校をめざす ※WWLコンソーシアムの形成に向けて、今後およそ5年以内に、アドバンス・ラーニング・ネットワークを形成した拠点校を全国に50校程度配置する	◆先進的な理数系教育を実施している高校等を指定し、支援 ◆中等教育段階から体系的、先進的な理数系教育を実践。生徒の科学的な能力を培い、将来のイノベーション創出を担う科学技術関係人材の育成を図る ◆高校等の理数系教育課程の改善に資する実証的資料を得る	◆プロフェッショナル型：地域の産業界等との連携・協働による実践的な職業教育を推進し、地域に求められる人材を育成 ◆地域魅力化型：地域課題の解決等を通じた学習を各教科・科目や学校設定科目等において体系的に実施するためのカリキュラムを構築し、地域ならではの新しい価値を創造する人材を育成 ◆グローバル型：グローバルな視点を持ちコミュニティを支える地域のリーダーを育成
事業概要図			
取り組み例	▶国内外の高校生が参加する「国際会議」等開催 ▶短期・長期留学や海外研修をカリキュラムの中に体系的に位置付け ▶大学教育の先取り履修を単位認定する	▶各校における高度な課題研究 →主体的・協働的に学習・研究実施 ▶海外の高校生を招いた科学イベントを開催 →国際的に活躍する意欲能力の育成 ▶海外の高校生らと行う広域共同研究 →国や地域を越えた社会への貢献	▶ものづくりに関する専門的な技術を身に付け、地場産業を支える人材を育成 ▶衰退しつつある地域の振興方策を地域との連携により研究・実践 ▶海外研修等をカリキュラムの中に体系的に位置付け

\*文部科学省資料を基に作成

## POINT

いずれも大学や行政と協働して行われる。チャンスと捉え、積極的に参加の検討を。

SSHは従来通り、先進的な理数系教育を行う高校を指定し、イノベーション創出人材を育成するもの。大学は研究支援や育成・評価手法の開発などで協力する。

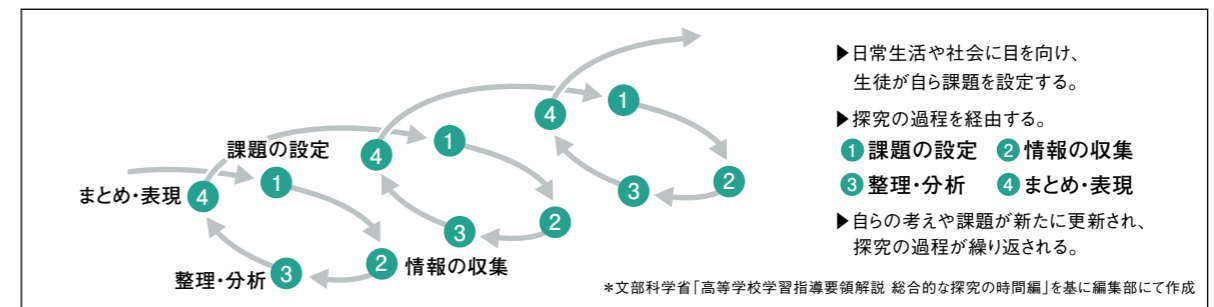
地域との協働によるものは、高校が自治体、大学、企業等とコンソーシアムを形成し、地域課題の解決をめざす探究活動を行う新規事業。学科や取り組み内容によって、3つの型が用意されている。

高校が大学等と協働して社会をリード、支える人材育成

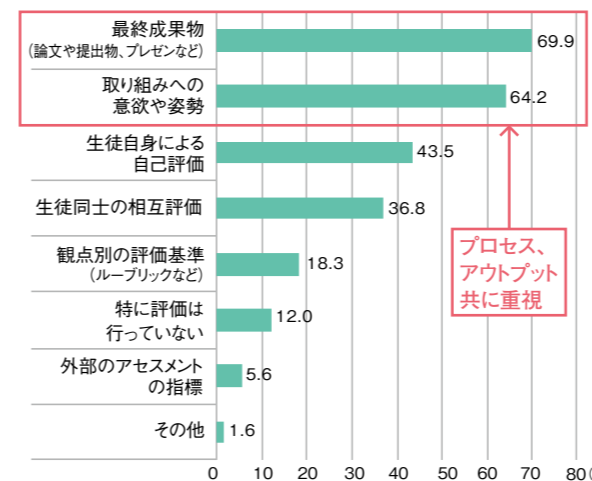
文部科学省による、社会の要請に応じた人材を育てる高校向けの指定校事業の目玉が上記3事業。Society5.0時代に向けた先進的なプロジェクトとして実施されている。

WWLは、拠点校を中心に複数の共同実施校、国内外の大学、企業等が協働してグローバルな社会課題研究カリキュラムを実施する新規事業。今後5年間で拠点校を50校程度配置する予定だ。

【図表12】探究における生徒の学習の姿

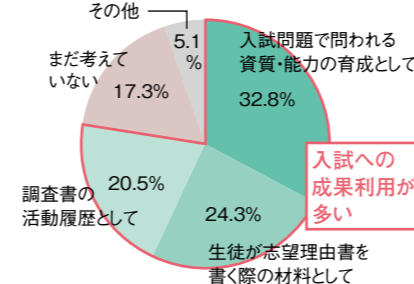


【図表14】探究学習の評価対象 \*複数回答



\*ベネッセコーポレーション「総合的な学習の時間」における探究学習の実態調査(2018年6月実施。全国の高校約1000校へのアンケート調査結果)

【図表15】探究学習の成果利用

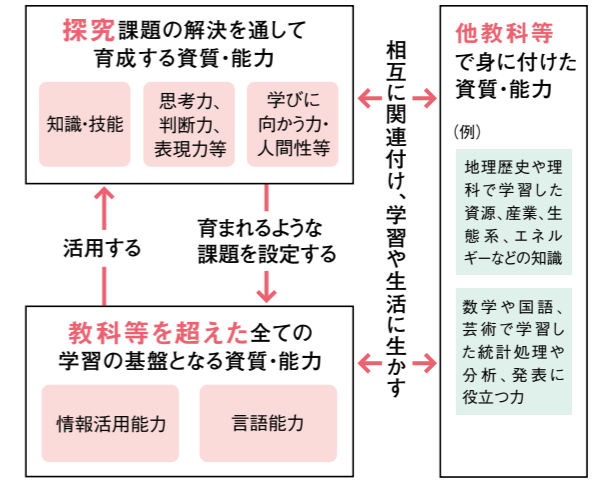


\*ベネッセコーポレーション「総合的な学習の時間」における探究学習の実態調査(2018年6月実施。全国の高校約1000校へのアンケート調査結果)

## POINT

探究学習で得られた資質・能力を大学はどう評価し、入学後発展させるか。

【図表13】探究と他の学習の関連



\*文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部にて作成

# Q 探究学習とは何か?

## A 進路選択に影響を与える課題解決型の学習。

新学習指導要領で重視されている「探究学習」とは、「日常生活や社会に課題を見つけ、解決に向けて情報を集め整理・分析してまとめ、そこから新たな課題を見つけて解決に向け行動すること」を国際理解や環境などの現代的な諸課題、町づくりや防災などの地域課題、文化や職業など生徒の関心や進路に基づくこと、あらゆるものがテーマになり得る。

探究学習では、興味を掘り下げたり、自己を振り返ったり、さまざまな視点を獲得したりすることを通して、生徒が社会と自身とのつながりを考えることが期待されている。そのため、一部の科目・授業だけではなく、全科目に日常

的に取り入れられることが勧められ、各高校は試行錯誤の真つ最中だ。中でも「総合的な探究の時間」では科目横断的な探究を、「探究」を付した科目ではその科目の範囲内での探究を主眼にした授業を行う。これら探究学習で身に付けた資質・能力と、それ以外の場面で身に付けた資質・能力を総合的に働かせて学習や社会に生かすことが求められている【図表13】。

したがって各教科・科目の評定には、探究学習の評価も含まれる。ただし「総合的な探究の時間」は高校ごと、生徒ごとに取り組み内容が異なり定量的な評価が難しいことから、身に付いた資質・能力を文章で記述することになっている。現状の高校での探究学習の評価対象を表したのが【図表14】だ。自己を振り返る探究学習は高校生の進路選択にも強く関係し、実際に利用することも想定されている【図表15】。入試種別を問わず学力の3要素が問われる今後の入試では、その重要度が高まるだろう。大学側も高校側の取り組みについての理解が欠かせない。